様式第１号（第１０条関係）

2023 年度業務実績報告書

提出日　2024 年　1 月 13 日

１．職名・氏名　　准教授・角田智詞

２．学位　博士（理学）、専門分野　生態学、授与機関　首都大学東京、授与年　2014 年

３．教育活動

(1)講義・演習・実験・実習

① 担当科目名（単位数）　主たる配当年次等

生物学実験（2 単位）1 年次
生物資源学概論（1 単位）2 年次
科学英語 I (2 単位) 2 年次
生態学 II (2 単位) 3 年次
植物資源学実験（1 単位）3 年次
植物資源学演習（1 単位）3 年次
環境生物学実験（1 単位）3 年次
専攻演習（2 単位）4 年次
卒業論文（8 単位）4 年次
地域生態学（1 単位）大学院生
生物生産環境学（2 単位）大学院生

② 内容・ねらい

生物学実験では、トウモロコシの植え付けから収穫までを圃場で一貫して実施する中で、植物の生理特性や分類、同定、成長や収穫量の評価方法を教えている。また、統計的な考え方の基礎を教えている。

生物資源学概論では、自身の研究テーマと福井の持続可能性に関連する話題を話している。

科学英語 I では、先行研究の情報を学生自身が得るために必須な reading の力を向上する点に重きを置いて講義している。

生態学 II では、生態学の基本的な概念と方法論について講義している。対象とする生物として、陸上生態系の中で種数やバイオマスが豊富な高等植物と節足動物に重きを置いて講義している。基礎科学としての生態学と応用科学としての生態学を相互に関連づけて説明している。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫

生物学実験では、デジタル推進委員会で導入していただいた小型無人航空機を用いた環境モニタリングを実施し、最先端の環境評価手法の実際を学んでもらっている。

科学英語 I では、単に英語を教えるだけでなく、自身がオランダやドイツで研究した際の経験を交えながら講義し、英語を勉強する学生のモチベーションが向上するように努めている。

生態学 II では、当日の講義内容に関連した実物の生物や標本をなるべく準備し、受講生がより具体的に理解できるように努めている。また、ゲストスピーカーとして科学技術振興機構の中村亮二博士をお招きし、カーボンニュートラル化が進む社会で生態学が果たせる役割について講義していただいている。

植物資源学実験では、自然再生士補の資格取得要件と対応して、生物を観察・評価するフィールドワークを九頭竜川河川敷で行っている。

地域生態学は 2 日間の集中講義として行なっているが、そのうち 1 日は敦賀市の中池見湿地でフィールドワークを行なっている。中池見湿地は、水鳥の生息地として世界的に重要な湿地の保全に関した条約であるラムサール条約にも定められた湿地であるため、フィールドワークでは湿地の貴重な生物を観察し、保全に関して理解を深めている。また、もう 1 日の日程では、ゲストスピーカーとして京都大学フィールド科学教育研究センター芦生研究林の石原正恵准教授をお招きし、地域社会と生物保全のつながりについて詳細に講義していただいている。
(2)その他の教育活動
土壌炭素貯留や栄養塩循環に重要な役割を担う大型土壌動物の定量評価を、未来共同プラットフォームふくい推進事業（福井県版 PBL 支援分）として行なった。調査方法は、かつて私が博士研究員をしていたドイツ生物多様性研究センターがまとめるプロジェクト“sOilFauna（https://www.idiv.de/en/soilfauna.html）”と共通のプロトコルで行い、海外や国内の他地点と福井の生物を比較できるようにした。得られた生物は、梅村信哉学芸員（福井市自然史博物館）の指導のもと同定した。学部生 3 名がこの事業に参加し、環境保全と密接に関わる生物パラメータの定量評価手法を OJT で教育した。得られたデータは、Scientific Data にデータペーパーとして投稿する準備が進められている。

４．研究業績

(1)研究業績の公表
① 著書 【0 本】
② 学術論文（査読あり） Tsunoda, T., Suzuki, J.-I. & Kaneko, N. (2023) Population density and diet type interactively affect individual growth of an omnivorous soil-dwelling insect (*Anomala cuprea*, Coleoptera: Scarabaeidae) 【1 本】
③ その他論文（査読なし） Nagy, D.U., Thoma, A.E., Al-Gharaibeh, M., Callaway, R.M., Flory, S.L., Frazee, L.J., Hartmann, M., Hensen, I., Jandova, K., Khasa, D.P., Lekberg, Y., Robert, P.W., Samartza, I., Shah, M.A., Sheng, M., Slate, M., Stein, C., Tsunoda, T. & Rosche, C. (2023) Clinal variation in drought response is consistent across life stages but not between native and non-native ranges. bioRxiv, 2023.09.28.559709 【1 本】
④学会発表等 【0 件】
⑤その他の公表実績 【0 本】

(2)科研費等の競争的資金獲得実績
科研費（挑戦的研究（萌芽））研究代表者. 2022 年 7 月-2025 年 3 月 公益財団法人旭硝子財団 環境フィールド研究分野・研究提案コース 研究代表者. 2022 年 4 月-2024 年 3 月

(3)特許等取得

(4)学会活動等
日本生態学会英文誌タスクフォース委員（2023 年 7 月まで）

５．地域・社会貢献活動

福井県福井南高校 環境教育講演会講師 福井市自然史博物館，第 89 回特別展「世界の大むしむし展 III」への協力・展示解説書の執筆 福井市自然史博物館，博物館だより No. 387 自然史リレーエッセイの執筆

６．大学運営への参画

(1)補職
(2)委員会・チーム活動
生物資源学科広報ワーキンググループ委員
(3)学内行事への参加
オープンキャンパスへの参加（8 月 6 日対面・8 月 27 日オンライン） 「もっと知ろう!生物資源学」への参加（8 月 7 日） 公開講座の主催（8 月 8 日・10 月 14 日）・参加（8 月 3 日）
(4)その他、自発的活動など